

ジョージ・イーストマンハウスコレクション展  
世界の偉大な写真家たち



**GEORGE  
EASTMAN  
HOUSE  
COLLECTION**

TR  
646  
.R63  
I555  
J6

## 写真展開催にあたって 渡辺義雄

日々印刷された多くの写真をわれわれは見ていますが、その原写真を見ることは極めて稀です。

大衆伝達の方法として印刷化できること、電波によって映像化することのできるの、写真のもつ特質の一つですが、その主題内容を深く追求し究極において写真家を知るためには時宜、時限的な発表物のみに止まらないで、原写真にまでさかのぼって探求することが大切です。最終作は印刷物だという作品においてもタブローとエチュードの関係のように原写真の探求は極めて重要なことです。その意味で今回のジョージ・イーストマン・ハウス（GEH）コレクションよりの写真展は大きな意義のある催しと信じます。

銀板写真の発明が公表されたのは1839年ですが、紙写真も同じころイギリスのタルボットによって試みられていました。そのタルボットの1842年の作品をはじめ1915年までの写真術の発達と表現の変遷の歴史を知ることのできる20数名の研究者、写真家たちの作品部門と、20世紀に入って近代写真への発展期から現代にいたる写真家8名の代表作の部門とのふたつよりなる合計300点の展示がこの展覧会の内容です。

作品は雑誌や年鑑、あるいは歴史書などで知られているものもありますが、ジョージ・イーストマン・ハウス以外には未公開の作品もあって、いずれも写真家自身の手になる仕上げの写真、あるいはネガから直接のプリントであるとのこと。写真の歴史の本の中でみているヒル、カメロン、レイランダー、エマーソン、オサリヴァンなどの名があり、近代写真の先駆的役割を果たすユージェーヌ・アッジェの作品は55点もあり、ウェストンも50点からあります。そのような歴史的な目でみるもの、現代の目でみるダヴィッドソンその他の写真家のいずれも独自の個性的な作品を見ることができるのは実に幸運の機会というべきです。

またこれら多くの歴史的な作品がコレクションの中からアメリカ国外で展示されるのはこれが最初とのこと。これも日本の写真界の水準の高さを理解されたバーモント・ニューホール館長およびネーサン・ライオンズ写真部長の絶大な好意から生れた贈りものとして、あらためて深い感謝の意を表すものです。

なおジョージ・イーストマン・ハウスの解説および各写真家の評伝などについての伊奈信男氏のご尽力に感謝いたします。

（日本写真家協会会長）

## ジョージ・イーストマンハウス(GEH) 伊奈信男

ジョージ・イーストマン (George Eastman 1854~1932)は、1888年にコダックを売り出したのであるが、そのときそれは「写真によるノートブック」であり、「諸君がボタンを押しさえすれば、後のことはわれわれがお引き受けする」といっているように、写真を真に大衆のものとした人である。彼は1905年にコダック社のあるニューヨーク州ロチェスターに、12エーカーという広大な土地を選び、部屋数が37ある三階建のジョージアン・コロニアル・スタイル(18世紀のイギリスの古典主義的傾向を反映している建築様式)の邸宅を作り、老いたる母とともに死ぬまで住んでいた。彼の死後、1932年から1947年までは、ロチェスター大学の総長の邸宅として使用されていた。この邸宅を写真関係の記念施設にしようという計画は、長い間あったのであるが、私邸を公共の建物にふさわしいようにするために、最少限ではあったが、あらかじめ2年間かけて内部の改造が行われ、1947年に、イーストマン・コダック社とロチェスター大学と共同で、写真博物館として設立され、1949年11月9日に、一般に公開されたのである。

ニューヨーク州当局によって許可された定款には、その目的として、次の6項目が挙げられている。(1) 故ジョージ・イーストマンに対する記念として、写真の博物館、およびロチェスター市内とその周辺における関連事業を設立、運営、維持する。(2) 生氣があり続きゆく写真の歴史を促進し発展せしめ維持する。(3)

デモンストレーションおよび展覧会によって写真を教授し、そこに包含されている各種の方法と技術に対する公衆の知識と興味とを育成する。(4) 写真および関連ある芸術と科学を促進し助成し発展せしめる。(5) 歴史的並びに現代的興味のある遺物、記録、器具、装備、材料、その他を受け入れ蒐集し保存する。(6) 上記の目的のいずれかを、直接に、あるいは上記の目的のいずれかのために組織された他の団体、法人、財団、施設に助力することによって、実行し完遂する。

またジョージ・イーストマン・ハウスは、その文書に、次のように書いている。「GEHは、写真と映画の博物館である。それは写真、映画、器具、記録、図書の永久的蒐集を維持し、館内および国内巡回の展覧会を組織し、写真と映画の歴史の研究を指導し、出版計画を支援する。」

このような目的をもって設立されたGEHは、現在のところ、約5万点の写真と、3000本の映画と、8000部以上の写真と映画関係の図書とパンフレットとを収蔵している。そして3部に分けられて、常設展示が行われている。

第1部は「写真の芸術」の部である。ここでは、タゲールやタルボットなど、写真の発明された当時から、現代にいたるまでの、およそ130年間を、19世紀の巨匠たち、20世紀の巨匠たち、近代の巨匠たちというように分けて、300点の名作のオリジナル

印画が展示されている。これらはすでに評価が定まっている作品から選ばれているのである。この常設展示以外の作品は、研究者などの申出によって、見ることもできることになっている。

第2部は「万人のための写真」の部である。ここではアマチュアの写真のすぐれたものが展示されている。写真を大衆のものとした人を記念する博物館として、ふさわしいものといえよう。

第3部は「写真の科学とテクノロジー」の部で、ここは「ミース・ギャラリー」と呼ばれている。これは偉大な写真化学者ケネス・ミース博士 (Dr. Kenneth Mees, 1882~1960) を記念したものである。ミースはイギリスに生れ、ラッテン・ウェンライト社の持主のひとりで技師長だったのであるが、イーストマンは彼を懇望するあまり、1912年に社ごと買収して、彼をイーストマン・コダック研究所長に据えたという因縁のある人である。この部では、写真の原理とその発達を示すような展示が行われている。写真の原理を示すところでは、露出の効果と自動シャッターの作用を示す装置も巧みに作られており、参観者が自分で操作できるようになっている。カメラやレンズや写真用具は、あらゆる時代のもものが集められており、この蒐集が世界最大のものといわれている。

この部には、写真関係だけでなく、映画関係のものも数多く集められている。そして収蔵の映画は、1951年に、ジョージ・イー

ストマンの姪のドライデン夫人 (Mrs. Dryden) によって増築された客席 550 のドライデン・シアターで映写されるのである。

このような常設展示のほかに、特別展が時々行われ、また巡回展も行われているのである。

現在は「写真史」の著者ボーモント・ニューホール (Beaumont Newhall) が館長で、「写真家の写真論」の編者ネーサン・ライオンズ (Nathan Lyons) が次長である。ニューホールはハーヴァード大学で美術史を学び、ロンドン大学とパリ大学でも研究した。メトロポリタン美術館装飾美術部助手 (1932~33)、連邦緊急救済局マサチューセッツ州公共事業美術計画事務官 (1935)、ニューヨーク近代美術館 (1935~40司書、1940~42司書兼主事、1945~46写真部主事)、軍務 (1942~45)、1880~1930のアメリカの写真の歴史と経済と美学を研究するためグッゲンハイム財団の奨励金受領 (1947)、GEH主事 (1948)、初代の館長、故オスカー・N・ソルバート大將 (General Oscar N. Solbert) の後を継いで、1958年に館長に就任したのである。

「博物館は教科書である。この教科書が、知識の最も明るく親しみやすい側面を提供するときのみ、それは魅力あるものとなるというゲーテの言葉は、このGEHにおいて実現されているのである。」(スイス・カメラ誌1951年5月号)

(写真評論家)